
眩い星、堕ちた星：色々な鼓動

璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眩い星、堕ちた星…色々な鼓動

【Nコード】

N3063B

【作者名】

璃

【あらすじ】

組織壊滅後のとある二人の事です。

FILE. 1神が下したかけがえのないモノここに

――組織は全滅した。

たったそれだけの言葉で解決された日本最大、いや世界最大の事件
それまでの数々の苦悩を乗り越えてやっとのことで今この地に立っ
ている。

――今は夜

いつも悲しげに地上に見守っていた星が笑っているように見える

漆黒の空に何億のも散らばる星

――全ての星に輝きをもたらしした。

青い地球^{ほし}に住みついた邪悪な闇は消え去った。

汚れてしまった一部の罪人たちも皆ある小さな探偵が彼らの組織を
潰した後、警察の手によって捕まった。

彼らの犯罪によって悲劇にあった人々も複数実在していた。

――しかし今は、彼らのような罪人は人々の街から消え去り平和に
なった。

爆発とかで焦げた街もすっかりもとに戻った。

闇夜にひそむ一部の罪人が居なくなったことで変わった島国^{にほん}

現在はあたたかい日常の日々を過ごしている。

何事もなく平和で・・・

――そう、今はもう何もかも災難はなくなった。

人々を悩ませる事件さえも……

目の前に存在難も……

しかし人々にはまだ一つだけ失っていないかけがえのない最も大切なモノが残っている。

決して災難とかそういう不幸的な事とは違う……

人なら誰でも持っている大切なモノ……

誰だって変化をとげてしまうモノ

それは“心”

長い間日常を過ごしているたび微妙に心は変化をしていく。

ほんの数秒さえも少しずつ心は変わっている

そして時間が経つにつれいつの間にか心境は変わり果てていた。

米花町に在住するみんなの心は変わり果てた

特に蘭と灰原この2人の心境は徐々に変化を伴った。

白き心を持つ蘭（Angel）

罪の十字架を背負いながら18年間生きてきた灰原（sherry）

人生も心の色も全く正反対な2人は心境が激しく変わっていた
ほんの些細な出来事でも何かいつもと違う2人

時間が1分1秒と刻むたびに何かが違う

“心の何か”が変化している・・・

組織の件は終了した

しかし新たに“心の中にひそむ何か”を得た気がする。

まだ2人には得た“何か”の正体が分からない。

神が彼女たちに下したかけがえのないモノ

それは、蘭と灰原の心の奥底に隠れている“何か”

その“何か”を見つけたすこと

それは彼女たちに定められた使命

神という存在不明な幻影がこの地上に2人の運命をあたえた・・・

それぞれ違う運命を・・・

「哀ちゃんどうしたの？」

私を呼ぶ天使のような美しくてきれいな声

声は澄んでいて私の心を全て見透かしている

「いえ：別に何でもないわ。」

ただすんなりと言うだけで終わる私の一言

彼女のあまりの優しさに耐えきれず素直になれない自分がいた。

今は、天体観測

あの子たち（少年探偵団）や工藤君、博士に園子さんや蘭さんなどがメンバー

数えきれないほどの星を望遠鏡から眺めている

あの子たちは喜んで星を観測

博士や園子さんはあの子たちの世話

私と蘭さんは・・・

お互いにそっぽ向いている

心がかすかに揺れ動く

何かが違うおさえきれない衝動
星も揺れ動くかのように輝き始める。

私たち、白と黒全然違う関係

——でも私たちは組織が壊滅してから同じように心の変化を伴っているよね……。

たとえば“得たモノ”は違っているとしても……

私たち何か変わったよね……

ねえ……漆黒の海、宇宙よ

短い時間で私たちは何を得たのかしら？

FILE. 1神が下したかけがえのないモノここに（後書き）

えっと、いろいろとありますが、あとちょっとでラストなんですネオチもかなり単純ですね：すいません。では、荒らしは断ります。今、評価にはさほど興味なくとも荒らしなんかには評価欄を汚されるのははっきり言って嫌だし、迷惑だからです：

荒らしとかは反応を楽しんでいるようだけど荒らす前に言うておきます

容赦なく消します

揚げ足取りの矛盾評価も消します（人をバカにしているんか？）っていう感じですね：

すいません。

私はかなり荒らしとかには煩いです

では、失礼します

FILE. 2等しく止まらない天秤

今は、満天の星空

夜空は地上へ限らない輝きをもたらす

その輝きを私たちにも分け与えるかのように・・・

――未知なる銀河の世界へ飛ばされるような妙な感じに躊躇いを持つ
行ったことのない世界に自分自身を動かしてしまいそう

今、自分の心に迷いがある

――平和な日常を取り戻したっていうのに
逆に平和すぎる今に妙な違和感を抱く

“平和”に越したことはない

やっと悪夢から解放されたのだから封印していた自分の思いも遂げ
ることができる

人々が一番求めるのは“平和”というたった二文字の言葉
何十年も封印されていた言葉があっさりと人々の中に戻ってきたこ
とに驚きを隠せない

平和だなんて言葉では簡単に言えるけど実行は難しいもの
言葉どおりに事が進むわけではない

数々の苦悩から解放されてやっと今、平和と言い切れる

こんな日が来るとは予想はつかなかった

もう自分の運命は監獄で埋め尽くされていると覚悟の一心でいた

小さい探偵の支えで組織の仲間を消滅させるなどもっと予想ができない

――しかしそれが今回起きた出来事

あつという間に組織との対決が終わったという安心感が妙に恐ろしい

今までの苦しみが消えてしまいうそう

植え付けられた苦しみや傷み（いたみ）を改めて感じる

邪悪の闇の訪問者は消えて何もかもなくなった・・・

ただの日常の日々の繰り返し

しかし私たちは組織との対決を終えて“何もかもなくなった”ということに少々の不満を抱いた。

何もかもなくなったわけではない・・・

私たちにだって幸せになる権利や追求心を持つことができる

何か新たな可能性は限りなく託されている

新たらしいモノを見つけ出す

そんな――誰にも動かすことができない心の鼓動を見つけてみたい

新たなる世界へ一歩踏み出す自分

向こう側にまだ知らない世界が広がる

かすかな光を保つ小さな星の先にも限らない魅力がある

――天の世界にあるモノ全て魅惑がある

今、私たちは銀河に引きつけられるように動き出している

星空を見れば見るほど限らない魅力に鼓動がうたれていく

一区切りずつうたれていく音がない鼓動

誰かが私たちを呼ぶ。

それぞれ違う名前をいつもと同じ声で呼ぶ

「哀ちゃんどうしたの？」

幼くて何の偽りもない優しい声で黒に染まった私を和ませる小さな

ブラック

彼女

“平和”がおとずれ彼女にとっての最愛の彼がこの世に存在なき少年になった。今、最愛なる彼は全てを元に戻し本当の高校生という姿で平和に最も大切な人とも日常を暮らす……

そのせいで最愛の彼と結ばれない運命に陥った可哀相な小さな女の子
自分自身の苦悩や悲しみを覆い隠すように私に対して笑顔で振るまう

いつもの微笑ましい表情は私から見ると偽りのように見える

——それは最愛の彼と結ばれなかった純粋な彼女の想いも私にと
ってはすごく痛感するから……

彼女がこんなに大人に変わり果ててしまったのは、私が偽りの彼の
存在を作ってしまったこと

さらに私は本当の彼を消し去ってしまいもう1人の彼女に数ミリの涙をこぼさせてしまった……

蘭さんと吉田さん

どちらかが幸せになると必ずどちらか不幸になる運命
彼女たちは傾き続ける天秤のような関係

今、幸せをもぎ取ったのは蘭さん
彼、工藤君も彼女のことを最も大切な人だったから……
だから彼は蘭さんを選んだ

選ばれなかった吉田さんは悲しみに堕ちている様子
今、私に精一杯の笑顔が無理して出している

あなたの無理がある笑顔なんて見たくないのに……
「さつきからどうしたの？」
哀ちゃん顔色悪いけど大丈夫？
具合でも悪いの？」

「ええ、ちよつと風邪気味よ……。」

「オイ、まじかよ。」

灰原具合悪いのかよ……
オレなんかピンピンだぜ!!」

「そりゃあ元太君は風邪ひきませんよ
よくいうじゃありませんか。
バカは風邪ひかないって……」

「何だと、光彦！」

元太は襟首を掴む

襟首を掴まれた光彦は『ちよつと元太君待って下さい。』といいながらあたふたする。

いつも事ね…。

半ば呆れながら元太と光彦を無視して蘭と園子の方へ視線をおくる

蘭さん…、あなたは何故今も悲しそうな表情をしているの？

あなたの最も大切が無事のままで戻ってきたのよ…：

私の最も大切な人はこの世から綺麗に消えてしまったのよ…。

私の方が泣きたいような気分よ

私はお姉ちゃんとの記憶を思い出すたびそれと同時にピストルによる“死への乾いた音が鳴り響いたあの日”も思い出してしまうのよ…：

私の方が悲しくて悲しくてしょうがないのに…：

蘭さんに心優しい親友の園子さんの声が届いていない

何回も何回も呼んでも上の空

「工藤君。あのね」

「何だ？ 灰原…：

「悲しげな彼女（蘭さん）をどうすればいいのかしら？

彼女には何も見えないぐらい落ち込んでいるみたいだけど、工藤君何か知っている？」

「いや、蘭はいつでもどおり何も変わらない様子だったけど・・・でもアイツは自分の心の内を人に見せないからな・・・正直分からねえんだ

蘭の心は密かに揺れ動いているから・・・

探偵事務所で居候していたオレですら蘭の裏側にある“哀しげな心の動き”には気づかなかった

いつものように会いたい時に会えて距離感は近くなった筈なのにでも何か違う

最近は蘭が少しずつ変わってしまったようで距離感が以前よりも遠く感じるんだ。」

工藤君はさらりと呟いた。

彼も感じていたのだろうか？

蘭さんの心境が揺れ動き変わっていつていること

そして日々蘭さんを見る度に少しずつ心が揺らいでいたこと

未だに星は輝きを保ったまま

蘭さんは手すりに両手を置いて追い求めている“何か”を一直線に拝んでいる

蘭さんの目線には夜空へ向いている

果てしない漆黒な宇宙は蘭さんの瞳にはどう見えるのかしら？

FILE. 2等しく止まらない天秤（後書き）

えっと、いろいろとありますが、あとちよつとでラストなんですネオチもかなり単純ですね：すいません。では、荒らしは断ります。今、評価にはさほど興味なくとも荒らしなんかには評価欄を汚されるのははっきり言って嫌だし、迷惑だからです：

荒らしとかは反応を楽しんでいるようだけど荒らす前に言うておきます

容赦なく消します

揚げ足取りの矛盾評価も消します（人をバカにしているんか？）っ
ていう感じですね：

すいません。

私はかなり荒らしとかには煩いです

では、失礼します

FILE. 3 漆黒の海に思いをはせる黒髪の少女（前書き）

1ヶ月も更新してなくて申し訳ございませんm（　　）m
いろいろと忙しいので……………。

漆黒の海∥宇宙

黒髪の少女∥蘭

今回は蘭Side）でいきます。

FILE. 3 漆黒の海に思いをはせる黒髪の少女

なぜ、今この地でこんな数え切れないほどの複数の星を見ることができるのか？

――それは、今までそれぞれが背負うべきすべての運命さだめを乗り越えてきたから

昔の自分たちと同じく眩い輝きが少ない。

漆黒の海のような宇宙そらからすれば“星”にも満たないような小さな微量の光を保つ粒

散らばるような複数の光にまみれた星をほんの些細な理由で

――ただなんとなくの気持ちで眺めに行く人々が限りなく存在していた。

あるひとかたまりのグループのような集団もただ何気なく“天体観測”を楽しんでいた。

――そのグループも、複数の天体観測を楽しむ人間の中に紛れ込んでいた。

どこにでも存在するような小学一年生ぐらいの3人組（小太りのガキ大将風の少年、やたらとそばかすの多い地学的な少年、おかつぱの黒髪が特徴的な純粋な少女）

外見だけだと小学一年生に見えるものの中身は大人びている男女約2名（伊達目がねをかけた何でも拔群そうな少年、落ち着いた雰囲気の特徴的な茶髪の少女）

普通、どこにでも存在するような黒い染まったその髪を靡かせる長髪の少女とその隣りには少々髪が短めな茶髪の少女が親しげに何気ない会話を交わしている。

その近くでみんなの保護者らしき白髪の老人が立ち尽くしていた。

一見、何事もないような暖かな雰囲気を漂わせている。

「……しかし本当は心の奥底では”何か”と”何か”が葛藤しているとは、まったく気付かなかった

宇宙は、黒く染ま^{そら}っている。

けっして邪悪に包まれたような闇夜の黒色ではない。

この”黒”は、”闇”を意味しているわけではない。

暖かな光を表示しているわけでもない。

ただ、黒い眩きを授けられた宝石のように散りばめてある

多種多様な光に包まれたような黒

みんなが観測している漆黒の海のような宇宙^{そら}は、限りなく眩い光に近い黒

善も悪もこの世のすべての可能性を秘めたような天空が今この地に授けられている。

（これから、何が起こるような気がする……。）

黒い長髪の美少女は、眉を微妙にひそめる。

限りなく散らばる輝きたる星を眺めつつ心底では、”何か”を悩んでいた。

誰かがどう見ても何も起こらなそうな自然な空気

この長閑な空気は何もいうことないぐらいに美しい。

しかし、黒髪を靡かせている彼女は“嫌な予感”

「……これから何かが起こるって予感が頭に駆け巡る。
疑念を抱きながらもただなんとなくの気分で観測を楽しんでいた。

「どうしたの……？ 蘭…

さっきからぼーとしていんだけど大丈夫？

何かあったの……？」

隣りの髪を茶色に染めた少女は何かを悩んでいる友のことを“蘭”と呼ぶ。

「その“蘭”と呼んでいる少女の様子に異変を感じて心配な表情をして眉をひそめる。

そばに居る茶髪の少女は友を思っているような瞳で“蘭”を見る。

とても深いぐらいに引き込まれるような瞳で…。

日常蘭と共に行動をする時の茶髪の彼女とは違った様

そこには彼女のまた違った新たな顔があった。

それは、今まで隠されていたその少女の素顔なのかもしれない。

一見何も悩みなく日常を過ごす彼女の裏側に人を“思いやる心”というものがひそんでいた。

十七年間けっして公の場では見せなかった茶髪の少女のもう一つの顔が、今この場で明かされた

「園子、何でもないよ……。」

蘭は茶髪の少女を“園子”と呼び偽ったような小学一年生に見えるある2人を少しの間見る。

“その2人”を見る時の蘭の表情はどこか寂しげで哀^{かな}しさが溢れている。

――最後の言葉に迷いが出る
語尾にどうしても“途切れ”が入ってしまう。

園子との会話を無理やり終わらせようとする心から少々強引な口調になる。

（本当に何が起こるような予感がする……。

今まで知らなかった未知なることが訪れるようなそんな気がするわ
…。）

何も根拠はない“ただの直感”

これから何が起こるのなんて神以外は知らないこと

その“ただの直感”というものが蘭には何かが訪れる前兆だと感じ
取れた。

根拠もない“ただの直感”に蘭は誰にも気づかれないように心を落
ち着かせて深く悩む。

今度こそは『園子に心配させたりしない』と自分で自分に誓う。

自分の深い悩みを考える前に友にたいする些細な心遣いをする。

自分がどれだけ悩んでいても友には“心配をかけたくない”ってい
う心遣いだけは忘れなかった。

「蘭、本当に大丈夫なの・・・？」

一体何を気にしているの・・・？

遠慮しずにもいいのよ……。」

やはり親友の園子にはどんだけ顔を覆い隠しても表情を偽っても何

かを“悩んでいること”を見抜かれてしまう
蘭は、（やっぱり園子には見抜かれてしまうか）と心の中で思いや
やうつむき加減で軽く目を閉じる。

また『何でもない』とはこの張り詰めた雰囲気では言えない。
かといって、園子に自分にも“妙な悩み”について心配してもらっ
て巻き込みたくない

“言葉が何も出てこなかった。”

――ただ黙って誤魔化すように億もの星を眺めていた。

“これから何が起こる。”

“その予感”を頭に刻んで今だけ見える漆黒の海に浮かぶ星に“何
か”を感じていた。

FILE. 3 漆黒の海に思いをはせる黒髪の少女（後書き）

えっと、いろいろとありますが、あとちょっとでラストなんですネオチもかなり単純ですね：すいません。では、荒らしは断ります。今、評価にはさほど興味なくとも荒らしなんかには評価欄を汚されるのははっきり言って嫌だし、迷惑だからです：

荒らしとかは反応を楽しんでいるようだけど荒らす前に言うておきます

容赦なく消します

揚げ足取りの矛盾評価も消します（人をバカにしているんか？）っ
ていう感じですね：

すいません。

私はかなり荒らしとかには煩いです

では、失礼します

FILE 4. 他の世界へ

——今、何か未知なるものが見える。そんな気がした。
何故『そんな気』になったのか・・・？

特に深い理由など無い。ただなんとなく未知なるものに遭遇する予感って云うものが自然に過った。

この場（夜の道）に居ても特別な『何か』が見える筈が無い。

見えるとしても今日に数多く散らばっている無数に近い星。

その星も所詮、宇宙に浮かび上がった飾りもの同然——何かを求めするために存在しているものって訳ではない。——何の異変もな
いただの星

今、現在決して気になるような特別なものが見えている訳ではない。
耳障りな雑音でさえも全くついていいほど入ってこない。——
——普通は多少なりとも雑音が混じって入る筈。しかし、一瞬一瞬の時
派手な音を感じなかった。風もただ通りすぎるように、向こうの
『未知なる場所』へと消えて行く。

沈黙空気にもにも程近い。静かな夜景が眼に凍みる。

——大人びて見える。姿形は何も変化がないように見えるけど…
”何か” 分かりきったような雰囲気を保ちだしている。

1日はもう終止符を打とうとしている。

流れるような時は、終わりが待ち受けているような感じがする。

しかし、”何か” がまだ終わりを告げてはいない。時よりもスピードが遅い感覚がある。

幻のような絶景を目の辺りにして驚いたような表情を浮かばせる。
”何か”を要求するように身を乗り出して今まで封鎖していた手を指しのばす。

『そこ』に手を指し伸ばしても存ずるのは、手の届かない数え切れないほどの星だけ。

しかし、それを求めて手を上に掲げる姿勢に整える。

頂点にまで達そうと引きちぎれそうな限界地に達した腕を上につ張る。

喉の先にまで出てくるような濁りを含ませた声を出さないように唇を噛み締める。

「蘭は……一体何をしているのかしら……？」

目の前の蘭の意味深な行動に園子は思わずつぶやきをこぼす。

疑問符を頭に浮かばせては、首を斜めに傾げる。

何も状況が理解出来ないことの不満が溢れて出て来る。

錆び付いた手すりに手をかけて不機嫌そうに一枚の絵のような蘭を拝む。

「——————！」

求めるものに向かう蘭に警戒して凝視する。

睨み付けるような冷淡な目つきをして顔色を変える。

不意に片足をぐっと前に伸ばす。”敵意らしきもの”を剥き出しにする。

”敵意”とまではいえないものが引き出されている。

何もいわないまま黙り込む。

一瞬だけ沈黙が貼り付けられた。

咳を軽く込んで『何か』を見届けようとする姿を示す。

（蘭さん…あなたまさか！！）

しっかりと今の状況を見届けてから自分の心の奥にまで深くつぶやく。

この妙に見えない状況に緊迫感が走る。

――今までに感じることのなかった”何か”が思考内で駆け巡る。
強張ったような強い目つきで漆黒の上空に視線を移す。

塵のような星が輝いて映される。

この光景に多少の違和感を感じながらそのまま疑いを持ったような目で複数の星を眺める。

漆黒の海のように紺色を帯びた空を注意を払って見渡す。

時がじつくりと流れるままに動こうとしていることなど忘れて。

何かを伝えようとしている星を凝視するために瞼をあけ綴じる動作を行う。

誰にも気付かれないように微笑みを軽く浮かばせる。注意のために入れ込んでいた力を軽く抜いて呆然とした様子に変える。

「どうしたの？ 哀ちゃん……。」
顔を覗き込んで心配そうにする園子と歩美が何気に存じていた。
そのどこからでも聞き通る声のせいか一気に現実世界に引き戻され
る感覚に陥る。

そして、今のこの状況を焼き付くように四方八方見渡す。
その現実の^{いま}状態をわかって事に『ふっ』と誰にもわからないように
笑いをこぼす。

次は、謎めいた意味深な笑みを浮かべて空気を吸って発言しようとする。

「蘭さんの気持ちもわかってきたような気もするわね……。」
苦々しい表情^{かお}に変えてその思い立った言葉を吐き捨てるようにつぶ
やく。
何かを考えているかのよう^かに上を見上げて無理したように咳込んで
微笑む。

「……………!？」

何のことか状態が全くわからない二人は頭が真っ白状態になる。
頭の真ん中に仄かな残像が描かれているようなはつきりしないま
まの状態になる。
不意に目線をゆっくりと横に動かす。
お互いに、身に刺さる一言からそらすような行為を起こす。――
園子と歩美は、じれったく視線を変動させる。

偶然にも同時に顔を見合わせたことにもお互いに驚く。

引き離されるS極とN極のようにお互いに身を捨てる感じになる。

ほんの僅かだけ、全身が引き離れたような感覚を味わう。
停止出来ないままそのまま揺らいでいく幻覚を感じた。

その幻覚に気を許していたことでまた状態理解に苦しんだ。
現実を^{いま}わからないままの二人を背にして蘭は星を眺めていた。
『何か』を追い求めるかのように…

FILE 4. 他の世界へ（後書き）

こんにちは。勇気を振り絞って更新しました。いいのか？とおもいつつ…こんな結果に…途中脱線しましたオチ最悪だろうと思って
います。本当に勇気を振り絞りました

FILE 5. 届かぬ距離までの挑戦

——何を求めているんだろうか・・・？

届かない”もの”を追い求めて一体何を楽しんでいるんだろうか？
客観的に見て行動範囲が全然につかめない蘭

しかし、対称的なある1人の少女が”何か”わかっていた。その気持ちは知り尽くしていた。

その事を知ったままの灰原は喉の奥から詰まりそうな声を手元で抑えて『その場』に立ちすくんでいた。

喉からぐつと込みあがるような奥の熱を無視して今の状況を呆然と様子が眺めていた。

「哀ちゃん…。どうしたの？さっきからどうしたの？何かあったの？」

また心配そうに壊れかけの表情を見せる。その表情のまま左右に顔を覗き込む。

——また余計な心配をかけたか・・・
脳裏でそんな事を思い浮かべながらいったんは、お互いに接するようにならしていた。

「別に何もないわよ・・・。ただ……………」

”ただ”——急に言葉が途切れて接続しないまま。
遠まわしのような言い回しで喋る灰原。

——その事から”何か他の”躊躇^{ためら}いが見られる。

言葉をいうにしてはじれつたいぐらいに長い『…………』の意味。一体何を示しているのだろうか・・・？

その長い余韻を気にかけていた二人が目の前でしゃがみこんでいた。『お互いに視線を向ける行為』を避けようとする”企て”を潰そうと考えているかのようにな……。

「ただ……？」

とっさの”呟き”を聞き逃す事がなく耳を傾けて慎重に『話すその瞬間』を待っていた。

純粹に答を受け止めたがっていることを示すように何気ない”笑み”をこぼす。

嘘偽りなど全くない純粹な笑みを見せて悠然とした雰囲気漂わせていた。

”何もないな……。”彼女の現在の様子を確認してそんな事を心の奥の自分に言い聞かせる。

その心に”確認の呟き”が突き刺さるまで繰り返し言い聞かせる。

「……あつ、ただ……ね……。蘭さんの気持ちを本当に知りたくてちょっとね……。味わって見ただけよ……。」

苦笑いを含みながら2人に納得させるように言葉の語調を強めて印象付ける。

「……………!？」

またお互いに顔を見合わせて灰原の発言に気に留める。
またわからないままの発言に疑問符を浮かべる。

「えっ、どういう事・・・？」

一瞬は、驚いたものの『純粹に答えが知りたい』という気持ちが強まって何気なく質疑する。

気付けば『知りたい』の単純な一心に心が動かされていた。

それが、そのまま行動に表れたのか斜めの角度に身を乗り出していた。

「……本当に何も関係ない事よ……。そこまで気に留めるほどのことなんかじゃないわ……。今だってこんな哀れなことを考えていたことに情けなく思うんだもの……。ふっ、振り返ればいつだって情けない事ばかり。良いことと言えることはめったになかったんだからね……。」

いつもと同じようにクールな口調でめんどくさそうに語る。――
何気なく瞼を綴じた状態にして腕を固定するように組み合わせる。

”語尾”になるにつれ思い立ったような表情に変える。

綴じたままの瞼を瞬時にひらける動作をして憫笑をまじえる。

「ええ……。どういふ事なの……？心配だから気になるの……。教えて！！お願い！！」

何かの”企て”などなしに精一杯に訴えかける。

困った表情を見せつけて『教えて』とサインを送る。

そして、しがみついては、衣服を軽くつかむ。

しかし、灰原は意地悪くして黙り込んだ状態を保とうとする。

困ったって”心は折れない”って事を強調する。突然のように掴まれた衣服のことを無視して悠々と一歩前進する。

「……………！？」

灰原の行動範囲について意味深でわからないままになったことで不満が零れる。

何も思い当たらず深く首を傾げて疑問符を浮かべる。

何気なく抜けかけた声を外に漏らす。

無機質に零れた”その声”は、なにげな雑音に消される。

一瞬だけ颯爽とした風が辺りに吹き散る。

しかし、歩美は爽快感がある風に揺らぐことなく背を向けた友の姿を凝視していた。

焼き付くように所々様子の確認を取る。

（まさかね…。何を求めているかと思えば、情けないわね…。まだ目の前に立ちはだかっている現実^{じま}以上のことを欲求しているの・・・・？——手の届かないものを求めても無意識なのにね…。情けないわね…）

そつと額に手の平を添えて肘を丸みの帯びた手すりに乗せる。

微妙にうつむいた顔をあげようと仕草をする。その瞬間に額に触れた位置を指先に変える。

指先の隙間から藍色の光景を見渡そうと顔を一直線にへと目線を変えらる。

”その光景を頭の中で焼き付かせたい”

その抑えきれない欲が触れていた指先を離す。

指先を離れた瞬間に瞼を大きくひらける。

そして、瞼をしつかりとあけたあとに漆黒の海のような景色を目に焼き付かせる。

FILE 5. 届かぬ距離までの挑戦（後書き）

さてさて、一体どうなるのか？ あらすじ変えました。ちょっと無理がありそうなので……

FILE 6. 浮かび上がる一つの残像

この幾全とした光景を焼き付かせるために輝き星に凝視し続ける。
その”何か”目に映らない幻のような事を脳裏に浮かべようとする。

いつもなら決して一つのものに惹かれていくなんてことはなかったけどしかし、今日だけは違った。
いつも以上に顔色を変えたり、様々なことに思考を働かせたりおおざっぱな変化を伴ってきた。

灰原の双眸には、今一つのものしか映っていない。
口元を緩ませて僅かに身を乗り出していた。
クールな彼女の滅多に見ることの出来ない素顔が何気なく表れた。

——しかし、そんな表情を作っているのもほんの僅かな時間だけ。
時を刻むと共にさり気なく近づいて来る人影に気づいては、不意に出して素顔を急いで隠す。
そして、振り向いた時のためにと考えて無表情を装う。

「何・・・？」

いつもと変わらぬ口調で小さめにつぶやく。
無表情のままを保ち出そうとわざと目を細める。

「いや、なぜ星なんか見たがるのか？と思ってな。」

何の変哲の無い普通の表情でいつもと変わらぬ口調で質問する。
コナンは、さり気なく一步前進してその後にポケットから手を出した。

「……………!？」

一見なにげな感じに質問された気がするが、一步前進した部分に『何か』の違和感を感じた。

微かに砂を蹴るような音が鳴る。

その音は、周りの騒がしい雑音のせいでほとんど消されている。

しかし、灰原には植え付けられるぐらいに耳に響いた。そのなにげな音が耳障りで印象的に残った。

「何か……私が星を見ない理由でもあるのかしら……？」

鼻高々しい態度で上目で質問をし始める。

いつもと全く変わらぬ雰囲気を保った状態にする。

なにげに道の横を抜いていくように通る。

足を小刻みに動かして一步步と前進をする。

「いや、珍しいなーと思って……。灰原が星を見たい!! だなんてそんなロマンのあるものを見たがるとは思えねーし、第一お前そんな柄じゃねえし。何かあったとは思えねーだろ? 一体ここで何があったんだ?」

眉をしかめて疑念を抱く。

捻ったようなしゃべり方をしてわざとらしく首を深く傾げる。

「失礼ね…。私だって……」

嫌みたらしく言葉を吐き捨てる。

語尾の言葉をつぶやく時に音が弱まる。

何かを思い立ったのかように不意に動かしていた手の動きを止める。

「……………!？」

何のことなのかわからないままに置かれたコナンは不満そうな顔色にして疑念を抱く。

何気なく『コツコツ』と足音を鳴らす灰原は何かいつもと違う感じがした。

相変わらずいつもどおりの雰囲気装っているもののどこか”いつもと違う事”を思い詰めているような感じがした。

（私はまだ……一歩も吹っ切れないのね…。）

何かに上手くいかない自分に対してがっかりする。——となりに立ちすくんでいる蘭をこっそりと視界内に入れる。

その蘭の様子を見て少しばかりの溜め息をまじえる。

虚ろな目で空に向かって何かを訴えかけるような”サイン”を表す。

『そこ』で立ち尽くして、時の流れに任せた状態でぼう然とする。

そして、手に抱えていた写真を見通す。

昔この世に存在する時に”自分の姉”として一緒に居てくれた”宮野明美”の写真を手取る。

顔色一つ変えていないその彼女の表情を完全に刻み込むように凝視する。

（お姉ちゃん…………。）

『何か』に安堵した様子でそっと微笑む。

いったん写真から目を離れたあとも脳裏に『本当の姉の姿』を焼き付けようとする。

錆びた手すりに軽く肘が触れる。

小さな砂が腕にくっ付いたような感触があった。――支えている腕全体に滑った感触が、くっ付いて来た。

――写真だけは、手放さないようにとわずかな力を入れてしっかりと固定する。

辺りを散らす風が極端な強さで吹き荒れているせいか朦朧としてくる。

――気を失いかけた一時

周りの物質に歪みが入って来たように感じた。視界内の光景がブレ

てしっかりと世界が、（※漆黒の星を眺めている地点）、反映されていない状態になる。

目の前の”ブレが生じた”光景を無理に眺めようとする。

限界地を越すまで腕を引っ張り出そうとする。星が自分のものになるような気がしたから…。

”——そんな事は有り得ない。”

無重力のない——何処が限界の地なのかわからないその限りなく輝きを保っている星に手が届くはずがない。

そんな事、現実的な彼女ならわかっている事。しかし、蘭と同じように魅入ってしまった腕の動きが制止しなかった。

宝物を求める時と同じぐらいに目の前に映る光景を求める。

海のように浮かぶ空に届いた感じがしない。——『まだ手は届かない。』』と思ひ込んで錯覚する。

灰原は、真剣な表情で漆黒の空に手を掲げた。

FILE 6. 浮かび上がる一つの残像（後書き）

さてさて、二人はどうなるのでしょうか？写真を持つ灰原は一体何なのか？まあ、単純です。

FILE 7. 本当の一步前進までに

灰原は、微かに手を上げていた。——そういつもの彼女なら決して起こす事のない行為が今、目の前で起きていた。

何かを”追求するような姿”が目の前で示されている。

「あ、哀ちゃん一体どうしたの・・・？」

真剣な眼差しで空を見上げる灰原に対して蘭は驚く。——開いたままの口元から、心配の言葉がこぼれる。

上げかけた腕の力を抜いてそっと下ろす。

その後にどこか寂しげな突き刺さるほどの痛々しい笑みを浮かばせる。

灰原は、蘭の”浮かばせる笑み”を凝視して『何か』を思い立つ。
顎に指先を軽く触れさせて『考える姿勢』を整える。

問いだしの言葉をかける蘭に対して迫るように軽々と一步ずつしり足を運ぶ。

地を踏み出すと同時に吹き出る砂埃を無視して軽々しく足を動かす。
地面に砂が荒れた状態で散らばる。

灰原は、その荒れた地面に気を留めず蘭に注目する。

「ちよっと……ね…。私の遠い過去を振り返っていただけだよ……。」

「遠い過去・・・？」

蘭は”何のことなのかわからない” っていういたげな表情^{かお}をして強張った眉の僅かな力を抜こうとする。

（えっ、”遠い過去” って哀ちゃんって小学生なんじゃ…。そんなにも”遠い過去” はないんじゃないあ……）

何気に零した灰原の言葉に対してしっかりと意識をする。

灰原の今までを振り返っては、色んな思考を巡らせる。

——『何か』を考え込んでいる強張った瞳をみせしめず。
眉を高く上げて思い詰めたような顔色にする。

「あら、遠い過去っていう発言に驚いているのかしら・・・？
でも、本当の私は”灰原哀” じゃないわ。」

「……………！？」

”本当は『灰原哀』じゃない。”

一体何をぼやいているのか？と疑念を持つ。

灰原の発言に理解し難くて自分の耳を疑う。”その言葉”が妙に耳に残った事を不思議そうに思う。

「えっ……?」

灰原の発言が意味深すぎてわけがわからずに抜けたような声が自然と出てしまう。

『その言葉』には、”何か”の意味は含んでいるのだから怪しげに思うのも悪いとわかっていながらも声が何気に漏れる。

「そんなにも驚かなくてもいいわよ。私は、本当は、”宮野志保”っていう名を持っていたのよ。」

「……………!?!」

唐突に”宮野志保”と名乗られても状態がわからない気がした。

何のことかさっぱりで”考え”が収まらないくて困惑する。

密かに片方の眉を上に向けてしかめる。

顔の前に二本の指をゆっくりと持って来て爪で皮膚を押さえ付ける。

「”宮野志保”——それは、私の本名そして、十八歳としての姿よ……。私は、今まで小学一年の”灰原哀”を偽っていたのよ……。

つまり今のこの姿は本来の姿ではないのよ……。

偽りの姿としてここに表しているのよ……。」

「えっ、今の哀ちゃんは本来の姿ではないの? 一体どういう……:こ
と?」

蘭はますます今の置かれた状況がわからずに疑問符を浮かべて首を深く傾げる。

灰原はその言葉を聞き取って確認した後握りしめていた”妙なものの”を取り出す。

「これは……？」

いきなり不思議な物質を目のあたりにして思わず声を上げる。

語調が、伸びたように耳元にまで届く。

「解毒剤よ……。あなたの彼をどん底に陥れた最悪な薬よ……。私は、自分の都合でこの解毒剤を使ったのよ。」

寂しげな表情^{かお}を浮かばせてそっと目線を空に向ける。

自分の犯した事実^{こと}を押し潰すようになるべく蘭を視界内に入れないようにする。

突風が2人の間を透き通る。新鮮な葉も荒だだしく次々と木々から落ちる。

葉が次々と無音で地に到達した瞬間、放置された砂埃がたつ。

突風が、砂埃を吸い込んで2人の間に吹き荒らす。

目の前が歪んで四方八方はつきりとしなない様になる。

気に留めることなく普通の状態のままにしておいた髪の毛が風の方
向へ靡く。

乱れた髪の毛は、目元を隠すように覆い被せる。

しばしの荒れた空間が、一つそこにあった。

「――私は、この解毒剤を飲んで小さくなったのよ。工藤君同様にね…。」
最後の言葉を哀れんでつぶやく。『その言葉』に蘭は印象深く受け取る。

「工藤君” って新一のこと…？」
不意に一番身近に当たる名前を口に出す。心配そうな気持ちを出して、更に声の音を上げる。

「じゃあ、新一が小さくなったってことなの？」
疑問なことだけど話の流れからしてと考え質問をする。

「ええ、そうよ。あなたの言っていることはすべて正しいわよ…。
彼も解毒剤で小さくなったのよ…。」

「ーじゃあ、その新一はどこにいるの？哀ちゃんいえ、志保さんなら知っているんでしょ？教えて!!」
蘭は訴えかけるような目で頼みをする。
押さえきれない感情が一気に溢れ出て来る。
泣きじゃくったような声が張り上げる。

それに対して灰原は冷静を装う。静かに瞳を綴じて口元を緩ませる。
「いいえ、私から居場所を教えたりしたら折角頑張って来た彼に申

し訳ないもの。ねえ・・・？」

後ろで呆然と立ち尽くすコナンを視界内に入れて笑いまじりに問いかける。

後ろを振り向いては軽く笑い流す。

「……………??？」

いきなり笑いをまじった灰原の様子が何がなんだかわからない。わけがわからないまま首を傾げる。

「あつ、聞き忘れたけどそういえば…………哀ちゃんの遠い過去って何？」

「えっ…?」

唐突に問い詰める蘭に対して思わず驚く。

「最初に言っていたじゃない。”遠い過去”がどうのこうのって。それと天体観測になぜあれほど感情が込めていたのか知りたいのだけど…。」

「ああ、あれわね…。秘密よ…。」

「……………!？」

蘭は謎がわからないことに深く首を傾げる。

その間灰原は、蘭が困惑している隙を狙って密かに写真に目を移す。実の姉がしっかりと映った写真を眺めて軽く笑いを零す。

『ふっ』と誰にも聞こえないぐらい小声を喉の先からつぶやく。最後にそつと爽やかな微笑みを浮かばせる。

（お姉ちゃんと共に行動して来た時と同じ懐かしさが蘇ってきたわね……。良かった。）

心底でこんな事を思いたてながら。

もう時は、随分と刻み込まれた。夜明け前の時まで時間が流れ揺らいでいた。——もう次の『何か』を思い立とうとした。

今日は、天体観測にしては妙な感じがした。

その妙に嵐感のあったこの天体観測は、その次へのステップを踏むための第一段階だったかもしれない。

その事を踏まえてある2人は、『その場』から去ろうと足を運んだ。

FILE 7. 本当の一步前進までに（後書き）

此で終わりです。単純でした。ひよつとするとこのストーリーの後日談を書くかもしれないです。いつかですね……………
またその時はよろしくお願いします

FILE 8. 路地裏の悪夢（前書き）

オムニバスのストーリーからちょっと取った物です。一応、短編付きなので。

FILE 8. 路地裏の悪夢

――ここはどこ？ わからない場所に自分自身を置いてしまう事で少女の不安を抱く少女が立ちすくんでいた。

辺りを見渡しても何も無い。

不安定な自分を救う『何か』が来る音沙汰も全く無い。――ただ目の前に存在する真っ黒なオーラつてもものに怯えているだけ。

目の前のカラスのような黒を好むものが何も躊躇^{ためら}わずに引き金を握っていた。

――引き金を引く事に何も迷いなどない。“懺悔なんて決してしない”といったげな表情^{かお}をして視線を向ける。

赤みがかかった髪が特徴な彼女がいろいろな想いを馳せて恐怖に満ちていた事など全く気にかけないで。

――冷や汗の欠片も無い指先にかかる引き金。彼には、自分を殺す事を何も感じない。

彼の感情に変化して我を取り戻す様子も無い。――そう思ってしまふと自分自身暴落してしまう。

そして、過去の哀れみた自分を途切れ途切れに振り返る。

そして、気を失ったような表情^{かお}になる。

随分と気が、遠く感じる。

いつ自分の終末になるのかわからないこの状況で。

――彼は、なぜ人を殺す事を遊びのように思い込んでいるのだろうか？

原因はわからないけど決して最初からそんな心を抱いているとは思

わなかった。

“最初から彼は悪い人では無かった”。『それ』を信じ込んでしま
うと重い過去がしつこく頭に廻る。

今日の前に立ちすくんでいる彼と遙か昔っていう時の彼は、『残酷
さ』がかけ離れている筈。

今の完全に組み立てられた『冷淡さ』は何がきっかけで“ここまで
”変わったのだろうか――？

そんなことを考えている間に死へのカウントダウンが始まる。

彼女が苦い思いをしているのに何も感情も躊躇ためらいも無しな彼は引き
金にかかった指を滑らせておいておく。

指が滑っている事にも少しの躊躇ためらいもない

――冷たい瞳で嘲笑する彼にまた恐ろしい不安感を抱く。

何もない路地裏で殺されることに更なる不安と恐怖が増していく。

――いくら後ろを振り向いても自分の身を救うかけがえの無い光な
ど全く無い。

『そこ』には自分自身が求めているものがなくてさらに嫌な緊張感
に包まれていく。

後ろを振り向いて『もしかしたら誰かが助けてくれるかも』って淡
い期待感を抱いてしまった事に思わず“後悔”もしてしまう

今の自分では決して味わえない残光の光など目にしなければ良かつ
た。中途半端に暖かな光を頼ってしまい迷いが零れる。

――この時点で死を決断しなければいけないのに：

何、淡い希望など抱いているのだろうか――？ 奇跡なんて期待して巡
ってこないのが現実なのに。

そんな事を頭の中で繰り返し廻り続ける。

「久しぶりだな……シェリー……。」

彼は引き金を絶対に離さないようにして低く感情の籠もっていない声をあげる。

恐怖に怯えた『シェリー』と呼ばれた彼女を嘲笑いながら。

聞きたくも無い悪魔の囁きに耳を傾けてしまい彼女は自分を失っていく

最後に何もない路地裏に鮮血な赤々としたものを飛び交うことを思い浮かべてしまう。

――自分も姉のように無人な場所に『鮮血なもの』を残していく末路だったのかと1人で納得をする。

(ジン……………)

目の前のカラスのような黒い衣服を着用する彼の名前を警戒するよう心の中で呟く。

それから、もう『自分自身を撃ってもいい』と覚悟を決めた構えをする。

「終わりだ……。」

ジンと呼ばれた者は彼女にも聞こえない小さな声で囁く。何も躊躇わず、引き金にかかった指の力を軽く抜く。

そして、限界までに引き金を引き上げる。

『引き金』を引いたと同時に妙に大きい音を響かせる。

死へと導かせる哀れた音が路地裏に一瞬だけ。

『バシユ……。』

その音を身に染みる程に感じて朝へと目覚める。

一体、自分の身に何があったのだろうか？何が起きたのだろうか？
気になって四方八方キョロキョロとしながら見渡す。

目にあたるのはバックでしつこく自分を包む朝の暖かな太陽光。絶望の闇に追い込まれた自分とは真逆な『希望』な雰囲気漂わせる光目の前の燦々としてくる眩しい光に呆気にとられる。

そして、今のこの状況（ジンに路地裏で追い詰められた時のこと）を振り返って思い出す。

（ふっ、またあの夢……。もう何回目かしら。）

額に手をつけて憫笑する。ほんの一瞬だけ恐ろしい状況に追い込まれていたものの“現実ではない”と思うとついつい甘い衝動に魅入り込んでしまう。

現実ではないと安堵している間にシェリーこと、『灰原哀』はベッドからゆっくりと降りる。

“その和らぎもすぐに途切れるとは、想定せずに。”

FILE 9. 唯一の電話（前書き）

オムニバスからの短編です

FILE 9. 唯一の電話

――“不安”今は、嫌と云う程不安

それは、突然の如く今まで居るのが当たり前の幼なじみが忽然と消えてしまったから…。

“毛利探偵事務所”と掲げた看板が貼り付けてある窓を眺めている彼女がいた。

その『彼女』は椅子に腰を下ろしてやや斜めに角度を下ろした。

自分が『この場』に居ることを悟られないように部屋の電気を暗くする。

微妙に隙間から透き通る光のせいかやや薄暗い。

その微かな光は、『彼女』を見守っているよう。

彼女はその光のせいか安堵感もちよっぴり感じた。――“不安”と”悲しみ”があってもポーカフェイスは保っていた。

彼女のポーカフェイスが崩れる事は無かった。『この場』は静かに自分自身を鎮めていた。

――それでも少しばかりの涙だけは零れた。

頬を伝わって次々へと小さな雫が零れ落ちていたとは気付かなかった。――あまりの”悲しみ”に今の自分の状態には気にかけていなかった

今、辺りを月照らす光が鎮まっている原因かは不明だが何故か”狂い”は無かった。

彼女らしく静かに涙腺を緩めていた。

「新一……。」

自分でも聞き取れない程の小声で今、自分が要求している幼なじみの名前を零す。

力など入っていないか細い声で、たった一言呟いた。

その言葉を呟いて彼女は一気に静寂へと墜ちていった。居もしない人物の名前を口ずさんでしまう事で余計に迷いが溢れた。――今、自分の目の前に存在する様々なものが虚しくて堪らなかった。

空虚な現実にはさまされている事に嫌と云う程に考え込んでしまう。

『何故、私は会いたいって思った時に会えないのだろうか？』

そんな封印された答に好奇心を抱く。答えを幾ら考えたって出てくる訳がない。

――封じられた答え。決して開く事の出来ない祕箱
自分では、決して掴むことなど出来ない答――でも、知る可能性も残っていると自分自身で淡い希望を抱く。

”会いたい”時に会えない

その要求不満が彼女の涙腺をさらに緩めます。

自分だけ事が望み通りにいかなくて余計に哀愁感に満ちてしまう。
どん底に陥っていく自分が存在する事に恐怖心を感じた。

”会いたい時に会えない”

自分に与えられた宿命なる言葉が浮かび上がる。しつこいように文字が廻って身に”インプット”しようとする。やけに”会えない”の四文字の言葉が強調されてシルエットのように浮かぶ。

音が強まった”会えない”の単語に永遠的なものを感じる。

自分たちの幼なじみの仲は完全に封鎖されたと解釈してしまう。

唯一、幼なじみの『新一』と云う彼からの電話が今までの”不安”と”悲しみ”を癒せる時だった。

――でもその些細な受話器からの声が途切れてしまうのももう早いうちに途切れそうで――目の前の現実が怖い

ここ最近、新一からの連絡が全くない。

理由は”事件で忙しくて連絡出来ない”だろうと想定出来る。

新一が連絡を怠った時は、大抵”事件で忙しい時”だと云う事は受話器越しで会話を交わした時に言い訳として聞かされていた。

それで、（相変わらず事件で忙しいのね…。）と心底で思っていた。納得していた。

本当は”心細さ”も残っているけど遥か遠くで頑張っている新一を思い浮かべるとそんな彼を”待たなければ”と頭の中でインプットする。

――自分に残っている哀れみの気持ちを押し殺そうとする。

” 新一は事件で忙しいから今、電話をかける事が出来ない”
電話をかけない理由を知っていながらも不安の渦に呑み込まれてしま
う。

目の前に存在しないせいか、新一が生きた感じがしない。

” もう新一は、帰って来ない ”――そんな予感を一人で感じてしま
う。

電話をかけて来ない 〓 新一の存在不滅を思い浮かべてしまう。

自分自身、そこまで思い詰めているのは大袈裟すぎるだとは、思っ
ていたものの、そう云う発想になっちゃおう

何故か、自分自身を追い詰めすぎるこの感じが妙に嫌な感じを受け
た。

「新一……。」

誰にも聞こえないそんなか細い囁きなど誰の耳にも入らない。零し
た言葉が余計に虚しく感じるだけ。

さらに自分をどん底に陥れた感を味わう。

壊れかけの小道具のような途切れ途切れな声に変わっていく自分に
違和感を抱く。

” 違和感 ”を感じ取っても何度も求めるかのように『新一……。』と
弱い音で同じ言葉を呟く。

心の奥底で万が一”唯一の願望たる電話のけたたましいコール”が自分に響くように奏でるのではないかと淡い期待を抱く。

――普通に考えればどこにいるのか分からない人がこんな時間ときに電話をかけてくる筈がないのに……。

自分を静寂感から抜け出そうとするにはプラス思考にへと無理やり持っていた。

そして、コール音が鳴り響く事を信じ込んだ。

少量の埃が被った窓から目を離して何気に置かれている携帯電話に視線を移した。

――コール音は何時に鳴り響くのか？

そんな淡い期待を求める自分が存在していた。

こんな時間に電話をする訳がないのに期待感を引き出してしまう。”望みのない淡い期待”なんてするだけ損だとわかっていてもついつい信じ込んでしまう自分

いい加減待ちきれないという気持ちを抱く自分に少し限りの苛立ちを表示する。

無理だとわかっているでも目線を携帯電話から逸らさない自分がいた。

眩しい月日かりを無理やり遮って目線をひたすら携帯電話を灯す光に着目する。

（新一：。）

緊迫のときが迫る程、待つ主の名前を浮かべてしまう。

思い浮かべてしまうと頭に強い音として印象に残る。

だんだん心の音が薄らいだといえどもまだ片隅に印象が消えず残る。ただ『新一：』の短い単語が、インプットされてコール音を待つ。

『Я Я Я Я Я』

微かなコール音と共に澄んだメロディーが彼女の目の前で奏でた。

高鳴る響きに一瞬驚きを隠せなかった。

”驚き”を打ち消して少し距離を離れた携帯電話を取る為に手を伸ばす。

ひよっとすると淡い期待も現実かもしれないとまた僅かな期待を胸に秘めて携帯の文字盤をじっくりと見た。

『工藤新一』

小さな画面に大きく表示されていた文字に呆気にとられた。

まさか”こんな奇跡”があり得るのかと自分の目を疑ったりもした。

――目を凝らして見て文字盤の文字は『工藤新一』のまま

幻覚も見ているのではないかと目を擦ってから見ても文字盤の文字に変化はなかった。

彼女は本当に『工藤新一』彼からなのかと疑念を抱いては携帯電話を耳に寄せた。

そして、電話の主が話しかけて来る事を待っていた。

「もしもし…蘭か？」

「……………!？」

一瞬にして鼓動が止まった。

特徴のある懐かしい声色に驚き絶句した。

本当に奇跡が起こった事に驚きを隠せず目を丸くする。

それと同時に（何故こんな夜遅くに電話をするのだろうか？）と首を傾げて疑念に抱く。

眉をしかめて追求するように1人で考え込む。

上を見上げて目を泳がせては1人世界に入り込んだ状態で考え込む。

「おい!! 蘭!？」

力こもった声で彼女に対して蘭という名前を呼ぶ。

『蘭』と呼ばれた彼女は直ぐに会話の方へと気持ちを戻す。

「あっ、ごめん。新一…」

いつもの何もない時の声をそのままにして出す。

ちよっと安堵感に寄せられて笑いの籠もった喋り口調にへと変える。

この瞬間が彼女にとっての”長い時”そして、安堵感に揺られている”幸せの時”

この時間に終末は残されている。

でも、今の彼女には先の終末より目の前に存ずる幸せの時間ときに僅かな安堵を感じていた。

この一瞬の流れゆく時間ときが幸せだった。

FILE 10. 見えない切迫感（前書き）

前のしようもない短編です

FILE 10. 見えない切迫感

「――自分は一体何を言っているんだろう？冷静に考えれば所詮、有り得ない空虚な妄想」

そんなものに何故自分自身はとらわれていたのか？

振り返って見ると情けない発想にも思えてくる。

私は、今まで何回有り得ない発想にとらわれていたのだろうか？

コナンっていう少年の行動や言動を目にする度に心底で（新一……）
って奏でるように思い浮かべている少女・毛利蘭がいた。

「――彼本人の前では、わざとらしくコナンⅡ新一に結びつける言葉をかけて。」

素直な哀れみた気持ちを覆い隠して憎たらしい口調で。その瞬間に見せる表情は”もう確信した”と言わんばかりの自信に満ち溢れた表情

探偵として事件を解いた時の新一よりも高々とした態度を見せ付ける。

「――彼が『ボロ』（自分の正体ばらす）を出すまでと厳かな意思表示をする。」

” 一步も譲りたくない。”

” 絶対に真実を解き明かす。”

その2つの言葉が自然と表にまで絡まって表情はさらにいかめしく変わる。

そして、表情を表示した後にコナンⅡ新一の等式を再び組み合わせる。

Ⅰーもし、自分の憶測通り、コナンⅡ新一だとしたら・・・？
僅かな冷静さを保った状態で等式の順序から辿ろうとする。
今までに感じた過去を深々と蘇らせようとする。

Ⅰーコナンと会ってからのエピソードは何だったのか？
しつこい程、頭の等式として廻っていた。

やけに浮かび上がる薄く染まったエピソード。多種多様なエピソードは重なって見える。
定かではない記憶をゆっくりと浮かべる。

コナンには、自分の”奥なる弱さ”をしまい込みそして、強気な表情を外へと出す。

長年の幼なじみの彼は、自分の弱さを知っているだろう。それに自分の心の強さの限界だって知り尽くしている筈
Ⅰーそんな事は想定していた。

でも、”譲りたくない”という一心で”強気な裏側”の自分を保とうとする。

心の奥底で穏やかなエピソードを唱えている自分を、表に”出さない”と自分に言い聞かせる。

（でも、コナン君が新一だとしたら……）

そこから先の言葉を考えたくなかった。

次なる言葉を自分に言い聞かせていたら自分が虚しくなるだけだとわかっていたから……。

言葉を繋げればわかっていた言葉を自ら打ち消す。

心の内面に出さないように途切れた言葉を封印しようとした。

自分の中でも『その言葉』を抱え込むことに不安感が揺らいだ。

不安感のせいか蒼白に染まっていく自分の表情に落ち着けなくなつた。

（もしも、コナン君が新一だとしたら……。）

額を軽く押さえて顔に僅かな皺を寄せる。

不安の渦に呑み込まれている感触を実感した。

「どうしたの？ 蘭ねえちゃん……」

（自分の正体がばれていることを自覚しているだろう……。）
思いつつ蘭はコナンの幼い声に耳を傾ける。

わざと声のトーンを高くあげているとわかっていても一瞬安堵感に満ちいった。

「……………!？」

『この状態は……』と思い、素直の安堵感を隠して切迫感をむき出す。
そして、コナンにまで大いなる”切迫感”を引き出す。

表面は

「子供の振りなんてしているんじゃないわよ。」といっただけな匂いを漂わせて威厳な空気をさらけ出す。

とりあえず彼の前だけは”切なさ”を見えない位にしまい込んでおこうと強く念を押す。

息を”ごくり”と呑み込んでコナンの表情を確かめる。

――蘭は、何か確信した表情を見せ付けるように浮かばせて強い視線をコナンにへと向ける。

早く化けの彼を剥ぐ事に僅かながらの力を注ぐ。

恐怖心を抱かせる為に拳を強めに握る振りを演じる。戒めの姿をわざと見せ付ける。

（やっべえ……。蘭のやつ……。オレの正体が”新一”だと疑っているなあ……。）

心の奥底で焦って言葉に濁りを増す。

焦っているせいか数ミリの日汗が身に染みる。

微かにガタガタと挙動不審な震えを構える光景を見せる。

蘭には、自分の怪しさを見せまいと平然な表情を無理に浮かばせる。”ちよつと無理がある”と思いつつ妙な苦笑いを見せて今の状況から逃げようとする。

――しかし、蘭は見逃さなかった。

妙に不安定なコナンの表情を1分1秒たりとも目を逸らさないようにして……。

『ならば』と”何か”を思いついたように『一本取った』とコナンにわからないように軽く笑う。

――蒼白な瞳の辺りに妙な皺を寄せて密かに震えてながら拳を握る。

引きつった瞳へと変えていく。齒にまで染みるように唇を噛み締め

る。

拳の震えも止まらない。指先にまで微かな震えが入る。

――自分ですらわからない程の怒りが込みあがってくる。何かの不満をぶつけるようなそんな気分に至ってしまう。

月光が窓ガラスの裏までに透き通っていつもと違うような眩く灯りを灯す。迫り込んで入ってくる光のせいで蒼白な感じを漂わせる。僅かな場所に白を多く照らす皓い月の光。

蒼く反映される彼らが『その場』に立ちすくんでいた。

半分の顔だけが、反射光を浴びている。

半分の目もとは影でせいで黒く隠れている。

――歪む影の残像が反映される。

お互いに『何か』を譲らない2人が、脚を小刻みに揺らしながら時の流れに赴くままにずっと同じ場所に立ちすくんでいた。

”僅かな風も2人の間には透き通らない”

自然の流れに沿う風にも決して入ることを禁じる境界線が『そこ』にあった。

FILE 1. 花卉散り行く今日の朝方（前書き）

前のしようもない短編です

FILE 11. 花卉散り行く今日の朝方

やや黒みの混じった蒼白に染まった空が消えて、陽が指し明るい残光が目映る今日この頃のどこにでも存ずる暖かな光景。いつもと比べて空・太陽・雲特別な変化などは見られなかった。

小鳥の囀りがしつこく頭に”インプット”するような感覚がする。

同時に囁かな風が揺らぎて少しの音色に至っている涼やかな朝

ーそんな希望に溢れ出ていた朝に”何か”が起こる
そんな事は頭にはめぐらなかった。

『今日もどーせ昨日と同じ。何もないはず』

いつもと同じ1日の始まり（スタート）から”自己判断”を心で唱えていた。

”そう簡単に不幸が訪れるわけではない”

そうタカをくくって”自己満足”に至っていた1人のポニーテールの少女が笑顔に満ちて行く先へと足を運ばせていた。

いつもの癖で運ばせている足は慣れたかのように広大な道に踏み入れる。

『そこ』へ進む為に一步一步足の動作を速める。

ー躊躇^{ためら}いを見せず機嫌を良さそうにしてその先の建物に目を映す。
『その建物』の見ては柔らかな表情を浮かべる。『目的地』に迷わず、足に速さを入れて『ある豪邸』にへと目を留める。

――目を留めては『目的地』にまで気を揺るがさないことを心掛け
ては最後まで不調な足を運び入れる。

短時間運ばせていた足を『目的地』で制止させて周りの空気に気を
集中させる。

魅入りされるように上に浮かぶ景色を目の辺りにした。目に留める
には執着しやすい豪邸に最初の視線を移す。

豪邸の一部分から当たる僅かなオレンジの残光が眩しく瞳へと映す。
突如映された一つの残光のせいか赤褐色に映る瞳が微かな反応を見
せる。

自然が反映した朧気な光景に一回瞼を大きく綴じる。現実の景色だ
と思ひ込もうと瞼を俊敏にひらけようとする。

半分ぼやけた目をこすっては先ほどと同じ視線をうつす。――豪
邸に何があつたのか？と引き込まれるように次なる視線を景色へと
移し替える。

豪邸っていうだけあって広がるように映る木々に舞誇る花卉

舞い散って花卉が落ちる時、我を忘れる程に魅了される。何も言葉
に出さずに”感動した時のよう”に圧倒された感を肌で感じた。

その数々の舞誇る花卉に惹かれて虚しく地へと沈む花卉のことなど
気にも留まらず

「綺麗やなあ。」

その眩きをいっても誰も反応など表示しない。言ったところで得す
ることなどない。

寧ろ1人で感情に至っても虚しいだけ

しかし、純粹に感じて関西弁を呟いた彼女にとっては”虚しさ”な
ど全くなかった。

”虚しさ”よりも呟きを発したことに”満足感”を味わう。

御機嫌そうな素振りで豪邸の辺りをまじまじと見物する。

柔らかな風が彼女の髪の手先までに注ぐ。

後ろで靡く髪には気に掛けず、残光に目を通そうと一直線にへと視線を映す。

反射光のせいか瞼を上下に動作している瞳は空色に反映される。

景色に満ちてあと、幻のような残光を見せた豪邸へと無動作一歩足を踏み入れる。

『目的』の人物を拝むためにとその人物の特徴なる”バイク”という物の存在を確認する。

その者が原因かは否だが荒々しく土が媚び付き少々臭いがきつい錆びが取り付いている。

バイクがやや斜めに止めた感じがして粗だっていた。

そんなバイクを目で追って確認に”満足”してから『目的の人物』が居る筈の豪邸のインターホンへと足を運ばせる。

インターホンを目の辺りにして今まで特に使っていなかった指先に僅かな力を先端までにいれる。

――瞬間的に使われる指先に微かな震えをまじえてインターホンに先端をかける。

『ピンポーン』って何気ない音色を鳴らして耳に嫌という程に響かせる。

近くじゃなければ聞こえない囁かな音色が一瞬だけ大きく響いた。それと重なり合うようにほぼ同じぐらいに廊下を踏みしめるような

刻んだ音がかすれて聞こえる。
近づけば近づく程音の途切れは強まる。

目的の人物が『その場』に存ずることを示す”音の途切れ”が強まる程、安堵感が表示される。
一瞬の一時にほっとしたように瞼全体を綴じて瞳を覆い隠す。
震えた指先の力を和らげては『目的の人物』の登場を望む。

玄関の戸が、途切れもなく無動作に開かれる。
その音に敏感に反応して『目的の人物』が現れたのだろうと淡い期待を抱いて俯いて顔を上げる。

「和葉どうしたんや？学校なら今日は休みやで……？」
いつもと同じ口調に同じトーンが耳に煩く響く。
もはや、今待ち望んでいた人物ではないかとさっきよりも淡い望みを期待して真っ直ぐ前に視線を向ける。

「別に何となく来ただけやで…。お姉さん役として来ただけや。」
和葉と呼ばれた少女は何もいう言葉が見つからなくていつも通り”お姉さん役”とか適当な理由で誤魔化しの言葉を入れる。

――彼女にとっては、いつも通りに目の前の彼の屋敷へ訪問するのは当たり前のこと
そんな感覚を持っていた。
言葉詰まりに少々苦悩していたが次の話題に変えようと喉の奥から別の言葉を発そうとする。

「あ、あのな．．平次」

とっさに考えた言葉が頭に廻る。あまりにもとっさに言葉を思い付いたが為にまともな言葉に接続しない。

何も言わないのは癪な気がして誤魔化しに彼の名を”平次”と呼ぶ。名前をインパクトあるように呟いたあと言葉に詰まって濁らせる。心底であたふたしながら、次の言葉を頭の中で巡らせようとする。

平次は、和葉が”伝えよう”とした言葉を遮って使い古したバイクに手をかける。
そして、さり気なくヘルメットを被る。

「平次。どうしたんや？どっか行く予定でもあるの．．？」
心配そうな表情を示して予定の聞き出しをしてみようとする。
瞳には、空色に染まった残像は消えて哀れみた蒼白の瞳へと変わっていく。

”ー何か嫌な予感がする．．．。”
更なる不安げが肌に感じる。

バイクで出掛けると”何か事件”とかに巻き込まれそうな予感が働いて嫌悪感を抱く。
指先が先端までに震えが増す。さつきとは違う”震え”が混じっている。

唇を密かに噛みしめて全体的に震えが始まってきた。

ー腕をさし伸ばしたい

しかし『彼に迷惑かけるわけにいかない』って心理が自然と働いて無理に拒める。

（平次の身に何かある気がする・・・。）
眉をしかめて瞼を小さく顰めて歯を強く噛み締める。

バックの映る太陽光が燦々と照らし続ける。

さっきまでは、暖かく感じたものの今は眩しすぎる感じがした。
太陽光の光がやけに熱くて髪を手で抑える。

片目を綴じてバイクに乗る”平次”を見送ろうとする。

「じゃあ行ってくるなー。」

平次な『何か』が迫ってくるような予感を気にも留まらず慣れた手つきでバイクを操作しようとする。

”送られるのだから”その事が義務化されている事を意識して変わらない笑顔を交わす。

寂しげな和葉を慰めるにはといつもと変わらぬ口調で事を喋る。

”不自然ではない”

最も自分らしい人物像を”インプット”させる任務を終えたあとバイクを瞬時に走らせる。

（平次無事でな．．）

心の中で淡い祈りを捧げてから哀れみな表情で下に注目する。
風が花卉を地面へと運ぶ。

その瞬間に花卉が地面へと散る。

しっかりと花卉の形が見えるように一つの花卉が落ちる。

見事に落ちた花卉を即座に拾う。

花卉を大切にするような手癖で拾い上げる。

「この花卉は散って役目が終えたんやな。」

まともに開いたくない瞼の下に蒼白な瞳を浮かべて憫笑する

――命あるものどこかで消え失せる。

花卉は今日地に辿り着く命日だった。

――人間も同様

そう、平次の命日は今日かもしれない

そんな嫌な予感が残像として深くよぎる。

（平次は．．この花卉のように．．消え失せないでな．．）

最後の願望を花卉に向かって問い掛ける。

――平次の運命を変えられるわけがない

しかし、和葉の中では祈りを尽くすこと
それが最大限の任務のような気がして願望に強く思いを込める。
思いを込める任務を終了させたあと、花卉を綺麗に置いてすぐに『
その場』から立ち上がる。

そして、颯爽な風へと身を注ぐ。
(平次無事だな。)

その言葉を何度も何度も繰り返して。

ただ平次の帰りを待っていた。

FILE 12. 待てまで (前書き)

しょうもない短編です

FILE 12. 待てまで

――もう直ぐ夕方

空が全体的にオレンジのように染められている。

燦々と照らしあわせていた太陽はもうすっかり沈んだ。

雲がやや薄く空の上に浮かんでいる。

雲も反映させてオレンジの色が入ったかのように染められる。

闇に近く程の”暗さ”が目には浮かぶ。

今は、この家の在宅者平次を待ち続けるように『豪邸』で静かな様子を表す。

前後に風が荒々しく辺りへと

木々の周りに散らばった花卉が微かな揺れを強めた。まるで『その場』だけは歪んだよう。

微かな土埃も花卉とともに歪みを表示された。

音もなく静寂な状態で風が吹き流していた。

――今、ポニーテールが特徴な彼女の瞳には遠くに広大に染まったのオレンジ色の光景がうつすらと浮かぶ。遠くの”世界”へと目を向ける。

自分からして反対側に窓ガラスには斜光が焼き付くように入る。

眩しくてそして、微量に褐色が混じっている。

紅く染まった瞳を大きく見開いて窓越しの光景に期待感を抱こうとする。

疲れきった紅蓮色の瞳を安らげる為にと瞼を大きく綴じる。睫の先端まで瞼の触れた感覚がややもどかしさを感じた。

目をこすってから”何か”次を透き通す残像に目を向けようとする。

宵闇の頃が近づいては、紺瑠璃のような空へと色の変化が伴う。

それとともに『豪邸の在宅者』のお帰りが全く見られなくて不安定な気持ちが増す。

不安定な気持ちを抑えようと指先に僅かながらの震えが入る。

――震え混じりに擦るように手先を動かす。

滲む冷や汗が片方の肌へとつたる。

左右の顎にも妙な冷や汗が滲みるように流れていく。頬に零れ落ちそうな程汗の感触を感じる。

”――彼はいつに帰ってくるのだろうか？”

その事を深く頭に刻んで帰ってくる瞬間を待つ。

綴じかけの瞼を僅かに広げて真っ直ぐに視線を向ける。

遠くを見通すつもりで淡い雲のかった夕日に深く目に通す。

遠くの夕日を眺めては自分が『待ち望んでいる』目的の人物に会えるのではないか？自分自身を慰めかけるように淡い期待感を抱く。

柔らかな風が後ろで吹き散らす。

心地よさがあったものの彼女には”心地よさ”より”寂しさ”が混じったような感を肌身で受け取る。

荒々しいバイクの音が微かに近く聞こえる。

道路の地面に響く荒々しい音が耳元で煩く聞こえる。

ー”もしかしたら”

ひよっとしたら『目的の人物』のお出ましなのか？そんな淡い望みを膨らまそうとする。

微かにしかあける事の出来なかった瞼を開いて瞳を盛大に開ける。

薄いオレンジ色の光景が瞳へと透けて反映させる。

噛みしめていた唇の力を和らげるように食いしぼる事を静止させる。軽く口元に笑みを浮かばせて”満足感”に満ちたといわんばかりの表情へと変えていく。

バイクのエンジン音がさっきよりも”荒さ”を増して『豪邸』へと到着した。

使い慣らしたような癖で操作してバイクを庭へと止める

バイクに乗った深々しい跡が媚びり付くと同時に砂埃が目の前で吹き荒れる。

風のせいか一瞬だけ目の当たりにしている光景がぼやけて見えた。

朧気に見える一瞬の光景に彼女は一步足を後退させるように運んだ。歪んだ感覚を直感しては、『現実を見よう』と無理に視線を前へと送る。

精一杯に瞼を敏感に働かせる。

全身の震えを抜けて感覚を覚える。視界を封鎖する煙った砂埃を拒むように押しのけて一步前進と足を軽々と運ぶ。

砂埃の荒れから出る瞬間に、息を軽く吸って自分自身に”爽快感”を与える。

砂埃のエリアから抜けて煙った風の嫌悪感を消し去る。
颯爽とした緩やかな風にと与える心地よさに満ちる。
風の”満足感”に気持ちを注いだあとに視線を真っ直ぐ正面に向ける。

「平次・・・」

切なげに目の前の人物の名を呟く。やっと現れたといっても多少なりの不安感が混じってきた。

自分自身を保つ事に不安定な感じを覚える。

自分でも”切なげ”が混じった言葉が濁ったのか不明しかし、出来るだけのポーカフェイスを保とうとする。
緋色の瞳にやや蒼さを増していく。

歪みが入った深紅の瞳が瞼で綴じられる感触がした。

紺瑠璃のよう色が変色していくようか浮かぶ空

一瞬だけ瞳の視線を空へと向ける。

揺らいだ空に”暗さ”を増して余計に不安の溝に堕ちる感じを覚える。

「どうしたんや？和葉・・・」

平次と呼ばれた彼は切なげな気持ちを覆い隠す和葉の気を留めずに軽々しく笑顔を笑顔を見せる。

ー何も無かった

そういいだけな表情を作る。

一瞬だけ背もたれにしていたバイクから離れて豪邸の方へと視線を

向ける。

そして、無言の状態が無動作に豪邸の戸に手を伸ばす。背を向けてから慣れた手つきで鍵穴に開けて慣れた感じで戸を開ける。

土埃を発たせて玄関へと足を運ばせる。

「和葉は家ん中に入らへんのか？」

不意に話しかけられて我に返る。

”切なさ”の込みあがり溶けていく気がする。

「あつ、ちょっと待ってなあ今、行くで．．」作った笑顔を浮かばせて豪邸まで足を揺らして運ばせる。

花卉が薄暗い夕日のせいで哀れんだように映った。

今日は、平次は無事だった。しかし、いつ危険が迫ってくるかわからない。

バイクで出かけた時に”怖さ”を肌身感じる。

そして、自分の元へ戻って来るまでが不安感に寄せられてしまう。

――今日、帰らぬ人になるのではないかと。

戻ってきた瞬間は安堵感を直感した。

しかしその緩やかな気持ちにすぐに途切れそうになる事が怖かった。

――和葉と呼ばれた彼女は一瞬の気の安らげを求める為に『豪邸』へと踏み入れた。

FILE 13. 思い立った日（前書き）

しょうもない短編です

FILE 13. 思い立った日

いつからだっただろうか？

”親友”という唯一の存在に出逢う事が出来たのは……

『親友』――それは、当たり前のように自分の隣に一番いる強い存在しかし、その存在が”当たり前”とは言えない彼女が一人、立ちすくんでいた。

深く俯いて哀れんだ表情を浮かばせて孤独感を味わっていた『越水七槻』の姿が学校の屋上の隅っこに映っていた。

途切れた壊れた機械のような声に変えて”親友の名”を零していた姿が一つあった。

――七槻の親友は忽然とこの世から姿を消した。行方不明でもなく死に様の確認もした。

――それで一つ確信した。

”親友は完全に帰らぬ人になった。”

それを知って”悲しみ”以上のものが込みあがってくる感じがあった。

死に様を目にして何か言いたい言葉が出なかった。

頭の中に複数の”言葉”と”思い出”が浮かび上がる。

瞳を綴じて俯いた姿勢で屋上の出入り口のドアの近くの壁にもたれ掛かる。

不意に溜め息を零して落ち込んだ時の姿勢をとる。

涙が零れ落ちるのをこらえて哀れんだ表情だけを浮かべる。

頬に嫌な冷たさが覆ってくる感触を感じる。――まだ涙の雫を頬に位置までにつたっていないのに濡れたような”冷たさ”があたる。

わけのわからない感触にとらわれながら、今のおかれた状況を最初から振り返る。

何も表さない軽薄な雲しか存じない水色に染まった空を見上げては、何かを思い立とうとする。木々が微かな揺れを起こして何かを意味づけている気がする。

よくよく考え直せば”当たり前の事”ではないかもしれない。

そう、親友だって人間

この世に生を受けて生きてきたものは、いずれ忽然となく姿を消す。人間もそれ同様

どんな形にしろ死という”無の世界”へといずれ落とされるの”当たり前”の事

七槻にも”死”というたった一文字の無の世界の光景を目にする時はある。

今じゃなくともいずれかは、味わうはず。それが親友の場合運が悪く若くして”無の世界”へ逝ってしまっただけの事

しかし、この事実には納得いかず業を煮やしている七槻が苛立った。

不安定な心を打ち砕きたい。屋上のフェンスから通るような声で思いつき叫びたい……。

そんな不満が溢れ出る。

瞼を一瞬の僅かな時だけ綴じる。それから、瞳を黒一色に染めて、口を尖らせた状態にまで整える。

それから閉鎖されていた口元を無理にこじ開けようとする。強い言葉を云う事を表すかのように呼吸を大きく行う。

「——なぜ、こんな事があるのよ……。」

不意に言葉を零した―その言葉の語調が弱くなる。

爆発的に”強み”を含んだ最初の文字がやけに頭の片隅に残る。

叫ぼうとして途中で言葉を止めた自分に対して情けなく感じた。

未だに残っている懐かしみのある写真を手に取って過去に対して思いに浸っていた。

彼女が亡くなった時の日の出来事を振り返る。

その亡くなる前に電話で遺した唯一の手がかりとなる言葉を我に返

ってじつくりと振り返る。

『助けて…変な喋り方の高校生が私を疑っている…。』
この言葉が白紙状態の頭の中で早く回転する。
そして、その言葉が像として綺麗に浮かび上がる。

やや斜め前に顔を近づいて雲を眺める。

不意に溜め息を零す。気力が失った状態で暇そうにして青い空を眺める。

ぼおーとして気が遠くなるような時間の中で屋上のフェンス側で『何か』を考えようとする。

懷に忍ばせていた”計画表”らしき白紙を取り出す。そして、新聞を広げる時と同じ仕草でその白紙の中身を開封する。
開封した瞬間、”その紙”を広げた先に見えた手書きの文字に凝視する。

細かな計画までが企ててある計画表を確認の為に読み直す。

探偵甲子園を開催する予定、親友を自殺に追い込んだ高校生探偵の殺人計画、ディレクターを雇う為の手口などが計画通りに書かれた跡が残っている。

（私の親友を葬った探偵がこの中にいるのね……。）

その事を頭の隅っこに深くインプットしてさらに計画を付け加え企てる。

何か思い立ったかのように立ち上がる。

『キーンコーンカーンコーン』と突然のように緊張感のあるチャイムが鳴り響く。

思考を破綻しようとする耳障りの音に対して煩く感じる。

耳に残るチャイムを聞いた瞬間、『何らか』の”合図”を示すように教室へと戻る。

俯いて落ち込んだ惨めな姿勢を直そうと整える動作をする。

鉛が装置させたような重さのある足を教室まで運ぶ為に歩む。

屋上から出る瞬間にふと思い出す。そして、計画表らしき紙に一瞬だけ目を通す。

計画表に記入された内容の書かれた部分を凝視して過去の事を思い出す。

”——親友は、高校生探偵に殺された”

今おかれた事実を頭に深く刻んでおく。

そして、その”復讐”を心の奥にまで言い聞かせる。

復讐を心に誓ってから屋上のドアに手をかける。そして、屋上をあとにした。

まだ復讐心が残ってままだ。

——学校の屋上で立ちすくんでいたこの日は探偵甲子園で殺人を行う計画を企てていた最初の日だった。

FILE. 14 盗る前に（前書き）

前に書いた下手な文です。もうめっちゃくちゃです

FILE. 14 盗る前に

淡い月光がこの街を照らす今日この頃、一人の白い衣服を纏った罪人が立ちすくんでいた。

まだ『公の場』ではその白き罪人としての姿は見せないままとりあえず、その『白き罪人』は、いつもの”ポーカフェイス”を保とうとする。

”何か起こるかもしれない”

自分でも計り知れない予感に陰しくなる。

嫌な冷や汗が頬にまで零れ落ちようとする。

――まだ狙うべき”獲物”は盗んでいない。そのことに深く責任を持つ。――今回の獲物は必ず盗まなければならない。

それだけのことを自分で”義務付け”ようとする。

まだ例の予定時刻は過ぎていない。

『ここ』に一人で立ちすくんでいた白き罪人は（モノグル）で顔を覆い隠す。

そして、月光のせいにか反映される腕時計に視線を向ける。

光を帯びたいつも腕時計を目の前にして表情を厳かおしいようにと作る。

1分1秒と時を刻む”腕時計”に視線を向けるたびに厳かな表情へと変えていく。そして、緊迫感が溢れ出る。

”一秒たりともその獲物を盗む瞬間を見逃してはならない。”

――盗みを実行する前にと自分の中で一つのことを強く意識をする。白き罪人と呼ばれた人物のIQ400の頭脳が、フルに回転する。

今回はどのように”盗み”を実行するのか？

そのことについて特に意識を固める。

再びIQ400の頭脳が速い速度で回転を繰り返す。

黒に覆われた空に視線を向ける。

黒い影が、前からも被る。

再び”何か起こる”

そのことを深々しく”インプット”してから白い翼を広げる。

少々荒れ気味に靡く風を無視しては、『目的地』に行く準備を整える。

大きな翼である『ハングライダー』を慣れた手つきで動作する。

揺れが生じるハングライダーに一瞬の時、視線を向ける。

自分の身の周りに微かな”歪み”が加わったような直感を覚える。

” 1分1秒時間を無駄には出来ない。”

” 時間が残っていない。”

それは、自分の中でもわかつていること

時間に迫られていることを頭の隅に置いて少々躊躇ためらいが表れる。

――” 命が惜しい”

そういう理由が躊躇ためらいを及ぼしたワケではない。

――命が惜しいっていうことよりも” 発される未知なる歪み” に迷いがこぼれる。

何もない” 変哲な場所”

普通に見ればところどころに錆び付いた形跡が残っているただのビル

存在を見かけない” 白き罪人” の基地らしきそのビルの屋上は、何も
ないただのビル

――そんな風に見えた。

客観的には、白き罪人が立ちはだかっていること以外に違和感など

というものは一つたりともなかった。

しかし、『その場』に立ち尽くす彼には屋上で感じた雰囲気が変わった。

『この場』から足を遠ざけようとする自分に対して襲いかかってくる歪みが増す。

増えていく”歪み”に益々躊躇^{ためら}いが表れる。

躊躇^{ためら}っている暇はない。

これから任務を果たそうとする白き罪人が一番自覚している。しかし、追い払っても決して消え失せることのない厚かましい歪みに気を逸らす。

”気を取り戻して上空を飛び立たなければならぬ”

そのことについて一番意識を高くしてハングライダーで飛び立つ姿勢に変える。

――”三十秒”

ちょっと動作を行えばすぐに過ぎていく僅かな時間。

しかし、白き罪人にとっては違う。遙か気の遠い時間に感じた。長い時間を辿ったような感を味わった白き罪人は、今までの出来事に苦々しく思う。

自分の中だけで密かな”緊迫感”が迫ってくる。

素早い動作を見せずに冷静に何気なく”ハングライダー”を使用する。

「さてと、獲物を…取るとすつか…。」

荒だだしい風のせいか途切れ途切れに声が交じる。

白き罪人のいつもの口調が小さく聞こえる。独り言で呟いた言葉が山びこのようにかえってくる感じがした。

”呟く”とともにハングライダーを飛ばしたせいか後ろから聞き覚えのある声が飛び交ってくるような感じがした。

ハングライダーで『目的地』に着くまでは、僅かな時間
白き罪人は、その”僅かな時間”で『目的地』にたどり着くこと―
―それを頭の隅に置いておく。

『目的地』に着くまでは、スピードを停止しない状態にする。
それを気にながら道を意識する。

自分を覆う肌寒い風などを気に留めずに目的地の『着地場所』を一点にだけ目を向ける。

――『着地場所』が見つかった。

その場所を知ったことに何らかの感情を持つ。

そのせいか、ハングライダーの速度が遅くなった。

速度を遅くしたのが原因かはわからないが緩んだスピードのままです屋上へと降り立つ。

それと同時に風で揺らんでいたハングライダーの微かな動きが、止まる。

その白き罪人は、一息ついて、屋上から遠ざかろうとする。

――”ポークフェイスを忘れるな”

屋上から足を遠ざける前にと週間付いたその一言を刻み込む。

そして、『大きな翼』を隠して、屋上のドアのノブへと手を指し伸ばした。

屋上のドアが開く瞬間――それが、新しい戦いが始まるとき

そして、運命が変わっていくとき――そう、もしかすると”死”と”生” 2つに一つしか道がないかもしれない。

そんな未知なる世界いきの最初の一步を踏み出した。

FILE. 14盗る前に（後書き）

半分ほど変な短編を入れてすみません。適当に書いた物ばかりで申し訳ない気がします。情けながらこんなんです。二度とこんな変な短編の寄せ集めなんてしません。付録みたいに初期の短編で組み立てたりしません。これからはちゃんとしたストーリーを書きます。次回作のこの眩いゝの後日談書いたら書きます。次回作忙しくて暫く投稿しませんが、気長に待つて頂けると嬉しいです。いや、もともと部活や習い事がハードなので投稿の余裕ないです。丁度一年後ぐらいには物書きとして戻ってきます私は明日から学校です。学業頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3063b/>

眩い星、堕ちた星：色々な鼓動

2010年10月11日14時32分発行